

実エンドウのハウス栽培における被覆条件下での播種時期

1. はじめに

実エンドウの秋まきハウス冬春どり作型では、ここ数年現場では収穫後期の枯れ上がりや早く、収量低下事例の報告が多くなってきました。このため、早期枯れ上がり抑止技術の開発が緊要の課題となっています。ここでは、低コスト耐候性ハウス等での栽培を想定し、被覆条件下における播種時期について検討しました。

2. 試験方法

品種「きしゅううすい」、「紀の輝」を用い、2006年9月22日、10月2日、10月12日に、外張り被覆したハウスに播種、うね幅180cm、株間20cm、1穴5粒播種で栽培しました（「きしゅううすい」は、3～8葉期に16時間の長日処理）。基肥は12-16-12kg/10a、追肥は全量液肥で適宜施用し、最低温度5℃で管理しました。

3. 試験結果

「きしゅううすい」は、各播種区とも「紀の輝」に比べて多収となりました。播種日

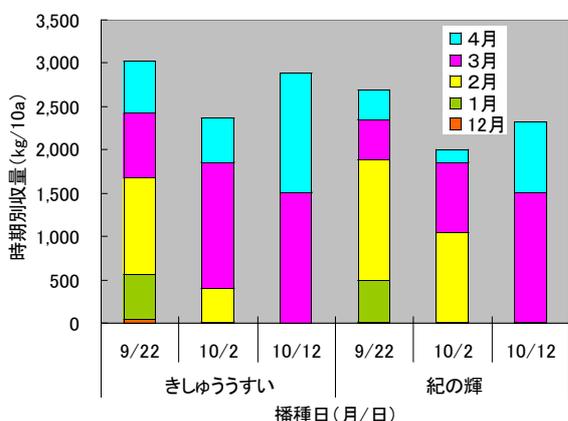


図1 播種日と時期別収量

お知らせ

人事異動（平成20年4月1日付）

転出 旧職名	氏名	新所属名
育種部主査研究員	村上豪完	西牟婁振興局産業振興部
園芸部副主査研究員	尾崎 健	就農支援センター
転入 新職名	氏名	旧所属名
園芸部研究員	小谷真主	新ふるさと推進課
育種部研究員	小川大輔	新規採用

では、両品種とも9月22日播種区が最も多く、次いで10月12日播種区、10月2日播種区の順でした（図1）。

時期別収量は、9月22日播種区では両品種とも2月、10月2日播種区では「きしゅううすい」が3月、「紀の輝」が2～3月、同様に10月12日播種区では両品種とも3～4月が多収でした（図1）。

L莢率は、両品種とも9月22日播種区が最も高くなりました（図2）。

4. おわりに

以上のことから、被覆条件下でも両品種とも9月22日播種が適当と判断されました。

今後、被覆条件下と慣行の被覆時期での播種を比較検討し、被覆時期が生育に及ぼす影響等を明らかにする予定です。

（園芸部 紺谷 均）

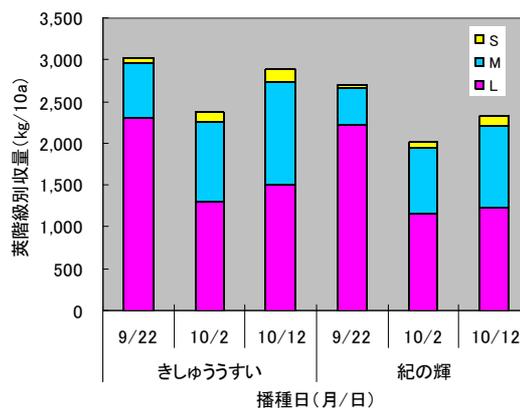


図2 播種日と階級別収量

注) L: 正常子実が4粒以上で極端な欠粒がない莢。

M: 正常子実が4粒以上で極端な欠粒がある莢、または正常子実が2～3粒の莢。

S: 正常子実が2粒未満の莢。

和歌山県農林水産総合技術センター 暖地園芸センターニュース No. 33

平成20年7月20日発行

編集・発行 和歌山県農林水産総合技術センター
暖地園芸センター

〒644-0024 和歌山県御坊市塩屋町南塩屋724

TEL 0738-23-4005

FAX 0738-22-6903

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070109/gaiyou/003/003.htm>
印刷所

（この印刷物は再生紙を使用しております）